日常の視点による地理教育の実践
―高等学校「地理総合」における取り組みと課題―

馬淵悠生
（済美高等学校）

要旨

「地理総合」の開設に伴い，すべての高校生が地理を履修することとなった。平成30年告示の学習指導要領では地理的技能の習得や地理に関わる事象の特色の考察といった力の育成が求められている。しかし，高校１年生の生徒が抱く，教科内容としての地理のイメージは「暗記科目」「自分には関係がなく取り組みづらい」というものであった。そこで，天気予報を例に生徒の日常生活と地理の学習との関連付けと，Web GISを用いた地図の読図を行い，地理的技能や事象の特色の考察力の育成を目的に授業実践を行った。その結果，生徒の日常生活やWeb GISを題材にすることで，地理の学習内容を身近に感じ，暗記ではなく理論に基づく思考が重要と自覚した生徒が一定数みられた。今後の課題は，より生徒の日常に沿った教材開発と，学んだ内容を基に，現在の世界が抱える諸問題に対して，その解決策を考え，取り組むことが出来るような生徒の育成である。

１　はじめに

2022年度より，平成30年度告示高等学校学習指導要領（以下，新学習指導要領）が実施され，すべての高校生が，３年間で「地理総合」を履修することとなった。新学習指導要領では「地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連」を多面的・多角的に考察する力の育成が求められている。また，内容の取扱いにおいては，「地理的技能を身に付ける」指導が必要となり，特に，地図の読図や作図，衛星画像や空中写真，景観写真などの読み取りが地理的技能として具体的に挙げられている。加えて，現在は，文部科学省によるGIGAスクール構想によって，１人１台端末環境が整備され，生徒が情報端末を用いて衛星画像や空中写真，Web GISなどに触れられる機会が拡大した。筆者の勤務校でも１・２年生の生徒においては，生徒個人が授業中にパソコンを操作できる環境が整っており，Web GISなどを用いつつ，地理的技能を身に着けられる指導を行うことは重要な課題であると考える。

他方，高校１年生の生徒に，教科としての地理のイメージや，中学時代の取り組みを質問したところ，「暗記科目であり，教科書の内容の関係がわかりづらい」「自分には関係がなく取り組みづらい」といった感想が聞かれた。かねてより，地理は暗記科目であるという認識は強く，すでに，澁澤（1990）が指摘しているように，日々の生活と学習内容とのかかわりが見えづらいことによって，地理の学習はすなわち暗記であるとする意識から，抽象的な内容を基にした学習内容となってしまい，覚えた知識を使いこなせず，現実世界とのかかわりを見いだせなくなり，地理に近づかない生徒が多くみられるという課題が指摘されている。すなわち，生徒が日常的に触れる事物と地理の学習内容とを関わるように指導していく必要があると考えられる。

以上のような問題意識から，本報告における授業実践の目的は，生徒の身の回りにある事物と教科内容としての地理との関連付けを行うことである。併せて，Web GISを用いた地図の読図を通じた地理的技能の育成を狙う。取り扱う内容は，沿岸部の気候と内陸部の気候の違い，世界の気圧帯の季節移動の２つである。気候に関する単元は，地歴公民科として重要な用語（いわゆる教科書で太字記載される用語）の暗記が多いと考えられ，地理を難しいものと捉え，嫌いになる生徒が多くみられるようになる単元である。しかし，例えば，上昇気流や下降気流の説明において，それぞれ，気球と小売店舗における蓋のない冷凍庫を例示し，温暖と上昇気流，寒冷と下降気流のイメージを作ることで，暗記に頼らず，科学的な視点をもって理解することが出来る。こういった日々の生活で触れるような事物と教科内容と